

図書館だより



2020年
12月号

2020年12月25日発行

2020年も残すところあと数日となりました。振り返ってみると今年はいつもおりにいかないことの多い1年であり、新しい生活様式へと変わったことも多いですが、色々なことに慣れながら頑張ってきましたね。まだまだ先の見えない状況ではありますが、来年はきっといい年になると信じて進みましょう。

さて、図書館は今年も無事に蔵書点検を終えました。3学期は1月8日(金)の始業式から開館します。図書館の本についてはインターネット上で蔵書検索(web opac)もできます。新着情報やブックリストも掲載されていますので、冬休みの期間に読みたい本を色々探してみてください。サイトのURLはクラッシーのコンテンツボックスに配信をしています。また新学期にみなさんと会えるのを楽しみにしています。よいお年を。



免疫力を上げて元気な体を保つ

498-オ 『免疫力を上げる「食」の本』 オレンジページ

私たちの健康を支えてくれている免疫力。食事の内容は免疫力を高めるのに大きな影響を及ぼすといえます。この本では、自分の食生活でちゃんと免疫力を高めることができているかを確認したり、免疫アップに効果的な食品や料理を知ったりすると同時に、免疫力の基礎知識を学ぶことができます。今の季節に嬉しい野菜スープの色々なレシピや食生活以外に免疫を高めるためのよい習慣、悪い習慣など、さっそく実践していきたい情報が満載です。この冬はいつも以上に健康に気をつけてきましょう。

「学連選抜」というチーム

B913.6-ド 『チーム』 堂場 瞬一 || 著 実業之日本社

毎年数々のドラマが生まれる箱根駅伝。来年1月2日、3日に開催される本選ではどんな感動が待っているでしょうか。箱根駅伝にはシード10校、予選会通過10校の他にもう一つのチームが出場します。出場を逃した大学の中から、好タイムを出した選手が選ばれる「学連選抜」というチームです。この物語は彼らを主人公に描かれています。共に頑張ってきた仲間とではなく、他校の選手と組み、自分は何のために箱根を走るのかという葛藤。まとまりのないチームで襷をつなぐことの違和感。複雑な思いを抱き、ぶつかり合い、答えを探していく彼らの姿に最後の1ページまで目が離せません。



2020これを読まなきゃ終われない!



『鬼滅の刃』が驚くような勢いでヒットし続けた2020年。図書館でもノベライズ版『鬼滅の刃』は予約待ちが続くほど人気でした。また今年は感染症やウイルスについて書かれた本に人々の関心が向いた年でもあり、1957年に出版されたカミュの『ペスト』が再注目を浴びたのも印象に残りました。家で過ごす時間が増えたことで本を読む機会が増えた人もきっと多かった1年だと思いますが、みなさんはどんな本と出会えたでしょうか。ゆつくりと本を読む時間を通して心を整えることができたらいいなと思います。

913.6-ハ 『少年と犬』 馳 星周 || 著 文藝春秋

この物語には何人もの主人公がいます。強盗がいたり、気持ちがすれ違った夫婦がいたり、病を誰にも打ち明けずに暮らす老人がいたり、笑わなくなった少年がいたり、と年齢も暮らしもバラバラな主人公たちですが、ある共通点があります。それは「多聞」という1匹の迷い犬と出会ったことで人生に変化が訪れるということです。人間の言葉を理解しているようなそぶりで、自分に寄り添ってくれる多聞に皆が心をなぐさめられます。多聞との出会いがもたらすものは単純なハッピーエンドではありませんが、多聞が誰にとっても大切な存在となったのが伝わってきます。

929.1-チ 『彼女の名前は』 チョ・ナムジュ || 著 筑摩書房

2019年、日本でも多くの女性の共感を得てベストセラーを記録した韓国の小説『82年生まれ、キム・ジヨン』の著者の新作です。この本で描かれているのは9~69歳の60人余りの女性が語ってくれたという人生の物語の数々です。大小さまざまな悩みを抱える彼女たちですが、誰もが試練に立ち向かい、強く生きています。「言うべきことを言える人にならなければ」「私には私の人生がある」「小さな勝利の体験が、より大きな問いかけや挑戦を可能にしてくれると学んだ」など、たくさんの言葉が読む人の心に勇気を与えてくれます。



図書館司書の「今月はこの本を読みました」



『和泉式部日記』の背景を取り違えるうっかりをしてしまいました。そもそも文学史で勉強しただけから記憶がぼやけるのです。反省。現代語訳だけでも『和泉式部日記』(B915.3-イ 角川学芸)を読みました。ビギナーズ・クラシックスという文庫シリーズなので、本当にお手軽で読みやすかったです。各章には「橘の花と郭公のバトル」「恋のスタートは[声]の和歌」という感じで題が補足され、親しみやすいです。この作品を文学史で見ると、恋多き女、平安時代を代表する歌人和泉式部と敦道親王との恋愛を、和歌の贈答を中心に物語風に書き記した日記ということになります。雅やかな世界なのでしょうと読み始めたのに、あれ、何か違う。怖い、怖い、怖すぎる。ヒーッ!! 知らない邸に放置されるし、親王の正妻は藤原氏出身だし、このままだと和泉式部は暗殺されるのではと、史実を忘れてドキドキ。記憶には刻まれましたが、ジャンルをホラーと誤認識してしまいました。クリスマス時期よりも夏向きの1冊でした。 【鈴木】

 **図書館で出会う！～【奇跡】に出会う編～** 

今日はクリスマスです。今朝、みなさんの枕元には素敵なプレゼントが届いていたでしょうか。夕食にごちそうやケーキが待っている人も多いことでしょう。いくつになってもクリスマスの日は自然と心が弾んできますよね。そんな気持ちの時には本の世界でもときめく体験してほしいなと思い、【奇跡】と出会う本を集めてみました。努力が起こした奇跡、思いがけない奇跡、聖なる夜の奇跡、たくさんの奇跡を図書館からみなさんへ贈ります。



◆展示本リスト◆

- 159-ヒ 『心が折れそうなときキミに力をくれる 奇跡の言葉』 ひすい ことろう || 著 SBクリエイティブ
→各界の偉人たちの名言とその言葉が生まれた秘話に感動と勇気をもらえます。
- 689-デ 『ディズニーランドであった心温まる物語』 香取 貴信 || 監修 あさ出版
→夢と魔法の国で働くキャストたちが体験したゲストとの心温まるたくさんの出会い。
- 764-フ 『長崎ブラバンガールズ』 藤重 佳久/オザワ部長 || 共著 Gakken
→全国大会とは無縁の吹奏楽部と強豪校の顧問を勤めてきた藤重先生が送る奇跡の七か月。
- 538-ヤ 『はやぶさの大冒険』 山根 一真 || 著 マガジンハウス
→60億キロを7年かけ旅した惑星探査機「はやぶさ」その大冒険は人々の心を熱くします。
- 913.6-ア 『鎌倉うずまき案内所』 青山 美智子 || 著 宝島社
→迷いを抱える人の前に現れるうずまき案内所。所長のお告げは彼らの道しるべとなるか。
- 913.6-ナ 『奇跡』 中村 航 || 著 是枝 裕和 || 原案 文藝春秋
→「家族がまた4人で暮らせるように」新幹線が起こす奇跡に願いをかける兄弟の物語。
- 933-デ 『クリスマス・カロール』 ディケンズ || 著 新潮社
→イブの夜、人間嫌いの老人の元に現れた相棒の亡霊。この再会が彼を驚くほど変えていく。
- 936-ボ 『ボブが教えてくれたこと』 ジェームズ・ポーエン || 著 辰巳出版
→人生の瀬戸際にいた僕に希望の光をくれた野良猫ボブ。ふたりに芽生えた友情の実話。

この中でも、いちおしなのは…

913.6-ア 『鎌倉うずまき案内所』 青山 美智子 || 著 宝島社

「はぐれましたか？」道に迷い、鎌倉うずまき案内所を訪れた人を出迎えるこの一言。案内所でこの言葉をかけられると不思議なことに道順ではなく、誰もが自分の悩みを語り始めてしまうのです。会社を辞めたい、息子の将来が心配、友だちに嫌われるのが怖い、色々な悩みが吐き出される度になんとびっくりアンモナイトの姿をした所長が登場し、悩みを解決へと導くためのアイテムを教えてください。半信半疑に案内所を後にする人々に果たして転機は訪れるのでしょうか。

 **新着本コーナーの気になる1冊** 

159-ナ 『心に折り合いをつけて うまいことやる習慣』 中村 恒子 || 著 すばる舎

精神科医の仕事をして70年になるという中村恒子先生89歳。今も現役で働き、たくさんの人たちの心を元気にしている中村先生から教わる人生を「うまいことやる」ためのヒント。『「逃げたい」という気持ちも、人生を変える原動力の一部』、『「うまくいかないけど、まあぼちぼちやりましょう」くらいの気概でええと思いませんか』など、人生に生じる様々な悩みに対し、気持ちが軽くなる言葉をかけてもらえます。



R596-フ 『すし図鑑』 藤原 昌高 || 著 マイナビ



この図鑑にはなんと321種の寿司ネタが載っています。人気のサーモン、マグロ、いくら、中とろなどはもちろんのこと、初めて見る寿司ネタが多く、「こんな寿司ネタもあるんだ！」と驚きの連発です。寿司ネタの味わいや写真だけでなく、ネタとなる魚介の写真や生態についても解説が載っているので、寿司の世界をディープに知りながら魚のことも学ぶことができる楽しい図鑑です。

B913.6-ウ 『ミッドナイトスワン』 内田 英二 || 著 文藝春秋

草薙剛さんが主人公を演じた映画『ミッドナイトスワン』を監督が自ら小説として書き下ろした1冊。新宿の歌舞伎町で働くトランスジェンダーの凧沙は、育児放棄にあっていた姪の一果を不本意ながら預かることになる。無感情で会話もしない一果に苛立ち、ぞんざいにしていた凧沙だったがある時、一果の踊る姿を目にして心を奪われる。その瞬間から孤独に生きてきたふたりの人生に変化が起こり出す。



B913.6-マ 『バベル九朔』 万城目 学 || 著 KADOKAWA



祖父の建てた雑居ビル「バベル九朔」の管理人として働きながら小説家を目指す僕。その僕が3年かけて完成寸前まで書き上げた大作のタイトルに悩んでいると、予期せぬ出来事が次々に勃発する。“扉”を探すカラスの目をした謎の女、もうひとつのバベル九朔と25年前にこの世を去った祖父が存在する謎の世界、目の前に謎ばかりが立ちはだかる僕は全てを解決し、無事小説を完成させられるのだろうか。